

ひょうごの遺跡

兵庫県埋蔵
文化財情報

45
号

平成14年8月30日発行

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032

神戸市兵庫区荒田町2-1-5

TEL 078 (531) 7011/FAX 078 (531) 7014

ホームページアドレス

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

特
茶すり山古墳
集

眠りから覚めた 古代但馬の王

兵庫県教育委員会では北近畿豊岡自動車道建設に伴い、朝来郡和田山町筒江において、古墳時代中期前半の茶すり山古墳の発掘調査を実施しています。

1月～3月は第2主体部全体と第1主体部に落ち込んでいた家形埴輪、そして墳丘の一部の調査を実施しました。

5月からは、中心部分の第1主体部全体と道路予定地内の墳丘全体、それから、道路予定地外の墳丘の部分的調査を実施しています。このたび、墳丘の大きさや中心主体の内容がほぼ判明しましたので、速報をお届けいたします。



鏡と刀剣の配置状況



墳丘北側斜面



古墳遠景（北西上空から）



谷部円筒埴輪出土状況



古墳墳頂部全景（東から）

墳丘の大きさ

茶すり山古墳は直径約86mの大きな円墳で、高さは約18mあり、墳丘は2段に造られています。

墳頂の平らな部分は東西約35m、南北約30mの楕円形で、平坦面が広いことが特徴です。

16世紀には砦^{とりで}として利用され、その時に墳頂部の削平や墳丘斜面の改築などが行われたと想定されます。

墳丘の外部施設（葺石と埴輪）

● 葺石

墳丘斜面には地山の角礫を使った葺石^{ふきいし}が貼られていましたが、砦造成時の改築により、残っている部分は多くありません。

● 埴輪

墳頂平坦部の外周に沿って円筒埴輪・朝顔形埴輪を巡らせていたようですが、倒壊や削平により、埴輪の下端部が10箇所ほど残っていたに過ぎません。

ただし、北側墳丘斜面には小さな谷状部分があり、転落した状態で円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土し、5本程度がほぼ完全な形に復元できそうです。

北側段築平坦面でも埴輪下端部を検出しました。1箇所のみですが、もとは一列にずらりと並べられていたと想定されます。

主体部

墳頂平坦部には2箇所の埋葬部分（主体部）があります。大型の第1主体部とその北隣の第2主体部です。

第2主体部は3月に調査を終了し、第1主体部は調査継続中ですが、どちらも盗掘されていませんでした。

● 第1主体部

2段に掘られた墓壇^{ぼこう}（墓穴）は大型の長方形で、東西約13.6m、南北約10.1mもあります。その中央に長さ約8.5m、幅約1mの組み合わせ式箱形木棺を安置していました。

木棺が腐ってできた落ち込みから大小の家形埴輪などが出土し、古墳築造時には各種の形象埴輪が主体部上に立て並べられていたと推定されます。

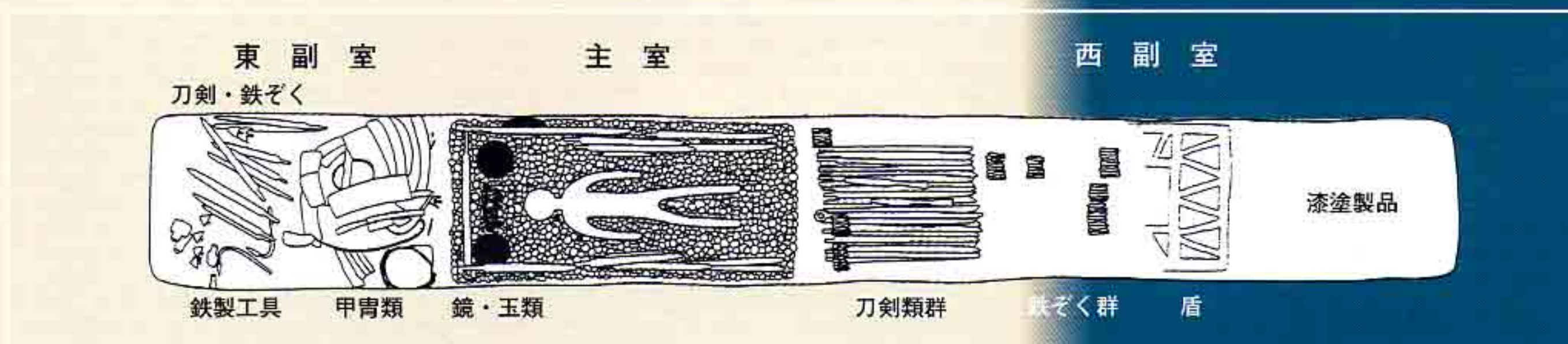
木棺内からは銅鏡3面をはじめ、甲冑^{かっちゅう}類、多量の刀剣類・鉄鏃^{てつそく}（矢じり）、盾、玉類、鉄製工具類や刀剣装（飾）具の漆膜など、多量の副葬品が埋納された当時の配置のまま、足の踏み場もないほど密集して出土しました。

木棺は底板が無く、棺の内面には赤色の顔料が塗られていました。棺の側板の高さは約80～90cmもあり、木棺の蓋板や側板の外側には厚さ3～5cmの粘土が塗られていたようで、木棺の腐朽に伴って棺内全体にその粘土が平らに落ち込んでいました。

1. 主室

木棺内は仕切り板によって3つの部屋に分かれており、中央東寄りにある主室の底には長さ2.2mにわたって数cm大の川原石が敷き詰められ（礫床^{れきしょう}）、遺体の埋葬部分としています。被葬者の頭位は東で、頭部のすぐ東側に3面の銅鏡が並べられていました。頭の上両側にあった2面の鏡（1・2号鏡）は鏡背面（文様のある側）を上にして平らに置かれたように出土し、残りの1面（3号鏡）は遺体頭部の向かって右上にあり、鏡面を内側にして棺に立てかけた状態で出土しました。

遺体頭部には1・2号鏡を置き、さらに刀・剣によって「コ」の字形



に囲むという、特徴のある配置方法を採用しています。また、遺体頭部付近には朱が集中してみられ、頭部左側に竖櫛が2点あります。

遺体の両脇には、刀剣を数本ずつ並べ、先をすべて足側に向けています。これらの刀剣には装具が付けられ、その漆膜が残っています。中には直弧文を施しているものもあります。主室内の刀剣数は約18本です。

1号鏡は頭部に向かって左上側にあり、直径16.2cmの仿製(日本製)「変形盤龍鏡」です。鏡の周囲には、碧玉製の勾玉1点をはじめ、碧玉製の管玉が約10数点散らばっています。

2号鏡は1号鏡の右隣にある仿製「対置式二神四獣鏡」で、面径は15.7cmあります。2号鏡脇でも管玉が数点あり、1・2号鏡の間にはガラス製小玉が非常に多く集中しています。

3号鏡は面径16.5cmの「内行花紋鏡」で、その細部の特徴から、内行花紋鏡のなかでも「魏晉鏡」と呼ばれ、舶載(輸入)品の可能性が高いと考えられます。

2. 東副室

主室の頭部(東)側には仕切板を隔て、長さ約2mの副葬品庫があります。西端に短甲(三角板革綴短甲)・頸甲・肩甲といった甲類と、冑2点(衝角付冑)の甲冑セットが置かれています。その東には刀剣類9本と鉄鍔数点のほか、鉄製柄付手斧2点、鉄斧4点があります。また、これらの副葬品の上には盾が乗せられていたようです。

3. 西副室

主室の足(西)側にも、仕切板を隔てて副葬品庫があります。長さは約4mで、東から刀・剣・鉾などの刀剣類群(20本以上)、鉄鍔群(100数十本)、朱塗りの盾、漆塗り製品と続いています。

刀剣類のうち鉾以外はすべて先を西側に向けており、刀剣装具の漆膜が数多く残っています。また、柄に鉄の輪を付けた「環頭大刀」と呼ばれる型式の刀が1本含まれています。

鉄鍔群は副葬時には矢束として置かれていたようで、先をすべて東側に向け、20本程度の束で4～5群に分かれています。刀剣類群の上にも、2～3群あります。

鉄鍔群の西側には鉄器類はなく、朱塗りの盾が2枚置かれています。盾は革などに漆を塗ったもののようで、薄い漆膜を検出することができました。羽状や菱形の模様が残っており、鋸歯文も認められることから盾と判断しています。盾と同じ模様の漆膜は鉄鍔群や刀剣類群の上や、主室の刀剣類・礫床の上にも小さな破片で見つかっていることから、東副室も含めた棺内全体に盾が並べ置かれていたことが想定されます。

なお、棺外の副葬品については未調査のため不明ですが、現在の地表より約20cm下に粘土を薄く敷いた埋葬時の面があることを確認していますので、棺外にも副葬品が納められている可能性があります。



1号鏡



2号鏡



3号鏡

第1主体部



刀剣類と手斧・鉄斧



鏡と刀剣の配置状況



主室全景（南から）



盾1



盾2



第1主体部木棺内副葬品配置状況

甲冑のセット



古墳時代の甲冑
(静岡県五ヶ山B2号墳)



刀 剣 群



鉄 鏃 群

● 第2主体部

第1主体部の北側に平行してあります。5月に新聞に発表しましたが、以下に概略を記しておきます。

約7.5m×3.7mの墓壙（墓穴）の中央に長さ約4mの箱形木棺を収めていました。第1主体部と同様、約2.5mの主室の両側に副室を設けています。

東副室では副葬品として鉄斧・鋤先・鎌・刀子などの鉄製農工具類53点以上が集中し、西副室では鉄鏃14本が束になって出土しました。

小口板で仕切られた主室内の底には、第1主体部と同様、5cm程度の円礫が2.2mの長さで敷き詰められ、遺体埋葬部分となっています。

東端には枕石が置かれ、櫛が出土しました。首にあたる部分には勾玉・管玉が、胸の部分には銅鏡1面があります。鏡の上やその周辺にはガラス小玉が400点以上散っており、遺体の両脇には大刀が各1本置かれていました。

鏡・ガラス小玉 鏡は直径14.8cmの仿製「二仙四獣鏡」で、文様側を上にして置かれていました。ガラス小玉は直径2～3mmで、鏡の上で連なった状態で認められました。

勾玉・管玉 勾玉は2点、管玉は12点あり、碧玉製管玉が2点、他は淡緑色の軟質石材製となっています。

櫛 長さ約7cmの複合の櫛で、葬送用と考えられているものです。

大刀 南側の刀は長さ101cmで、北側は長さ81cmあります。

標石 墓壙東側両隅に大石があり、墓の標石と考えられます。



西副室（合成）



東副室 甲冑（側面から）

主室

第2主体部

鉄製農具類



櫛
(北から)



勾玉・管玉



二仙四獣鏡



ガラス小玉出土状況

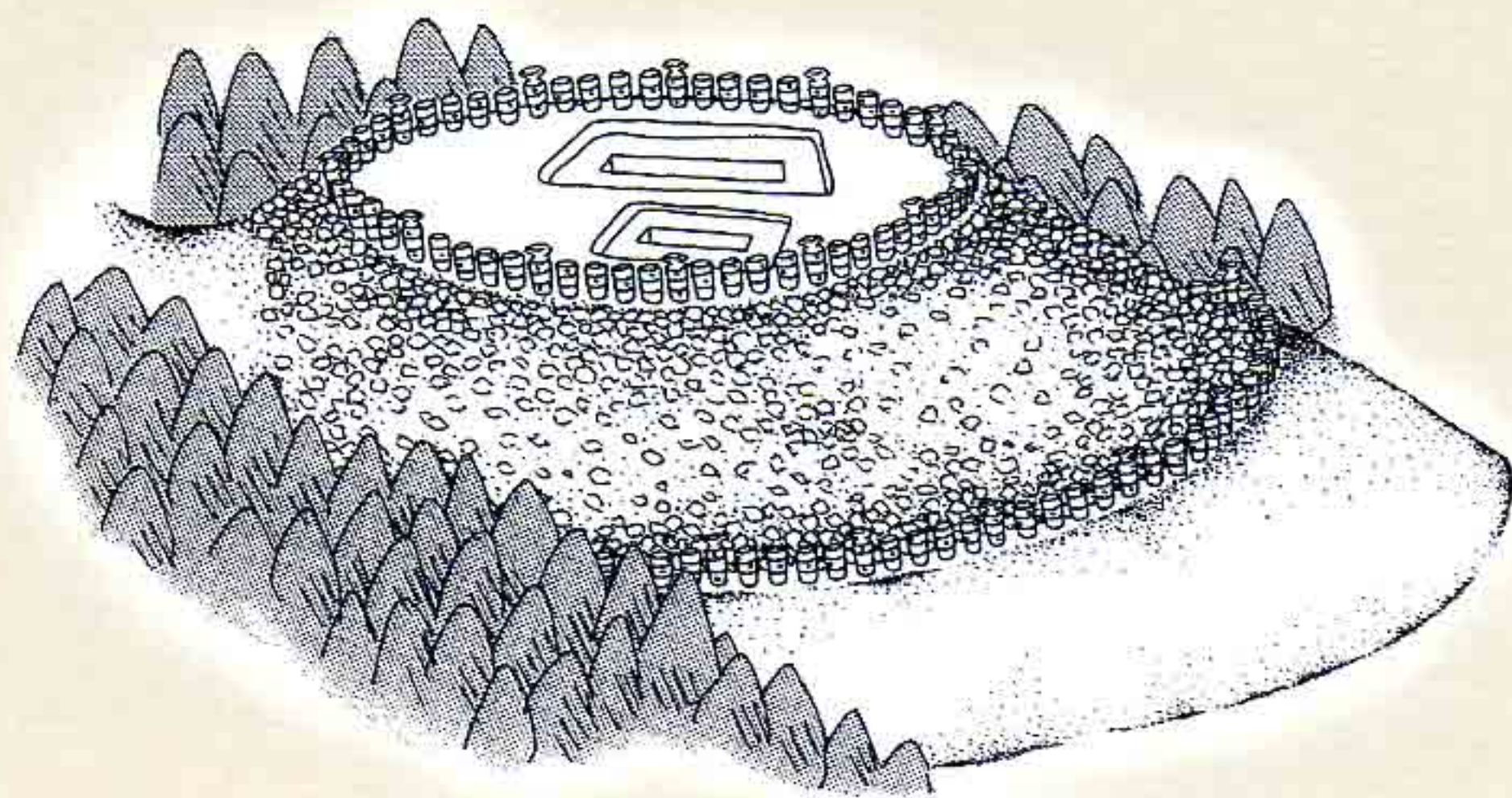


第2主体部棺内全景 (西から)

まとめ

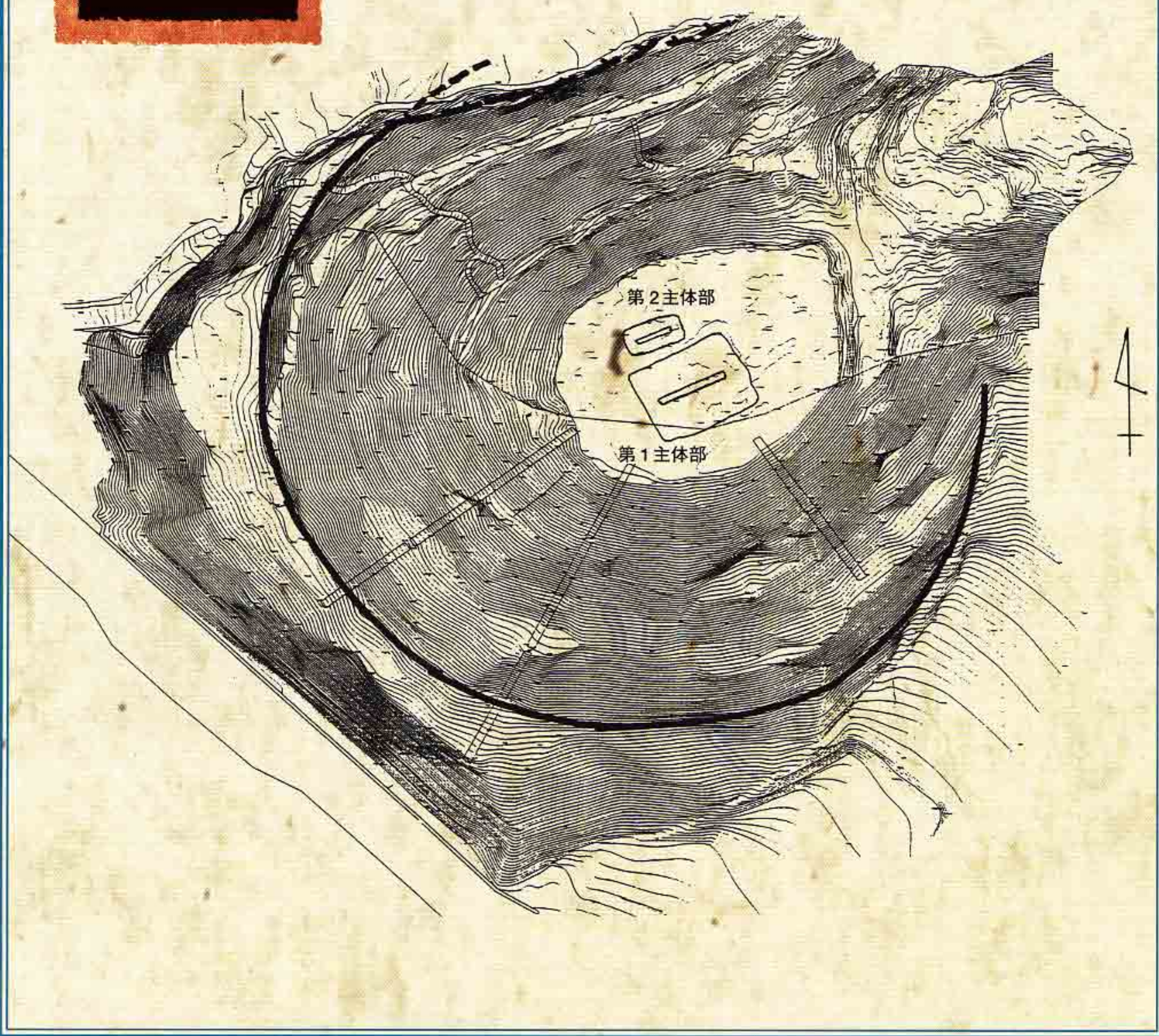
1. 墳丘直径は、円墳としては奈良県^{とみおまるやま}富雄丸山古墳と並んで近畿地方最大規模となり、全国でも6番目、西日本では第2位の大きさです。
2. 第1主体部の墓壇・棺はともに中期古墳としては全国最大級で、棺は大阪府和泉^{いずみこがねづか}黄金塚古墳と同長です。
3. 第1主体部から出土した鏡のうち、2面の仿製鏡は古墳時代前期の中央政権（ヤマト政権）のもとで製作され、配布されたと考えられているものです。茶すり山古墳では、出土位置から鏡をみると丁重に扱っています。埴輪からも中央政権との強い結びつきを想定できますが、今回出土した鏡はそれをさらに補強する形となりました。
4. 第1主体部の副葬品には、刀剣類や鉄鏃が非常に数多く、盾や甲冑類も複数認められることから、被葬者は武人的色彩が強いと考えられます。
5. 第1主体部から3面の鏡が出土しています。中期古墳からの出土数としては、多い方になります。
6. 副葬品では柄付手斧が注目できますが、それ以外に特に際立ったものはなく、全国共通の普遍的な様相を示しています。
7. 主室に川原石を敷く（礫床）のは、古墳時代前期以降の但馬・丹後地方に特徴的に認められる地域色の強いもので、箱形木棺を採用している点は但馬地方の伝統的地域色と思われます。
8. 京都府綾部市にあり、舞鶴自動車道建設によって調査され、トンネルで保存された史跡、私市^{きさいちまるやま}円山古墳よりも16m大きく、主体部の規模・副葬品の量もともに^{りょうが}凌駕しており、近畿地方北部を代表する古墳になります。
9. 茶すり山古墳の周辺では、南但馬最古の大型円墳である若水^{わかす}A11号墳（山東町所在）をはじめ、前期後半の^{じょうのやま}城ノ山古墳（和田山町所在）などが調査され、その内容が明らかとなっています。また、前方後円墳では中期初頭の^{いけだ}池田古墳（和田山町所在）や中期中頃の^{ふなのみや}船宮古墳（朝来町所在）があり、古墳時代の有力な首長墓が和田山町とその周辺に集中し、首長墓が連続して造られている地域として注目できます。さらに、中期前半の茶すり山古墳の内容が明らかになったことによって、中央政権との結びつきの変化をより詳しく捉えることができるようになりました。

茶すり山古墳の調査結果は、南但馬地域の古墳時代史のみならず、日本国家形成期の周辺地域の歴史を考える上で重要な資料になると思われます。



茶すり山古墳
地形測量図

(1/800)



編
集
後
記

南但馬に新たな王墓の発見です。

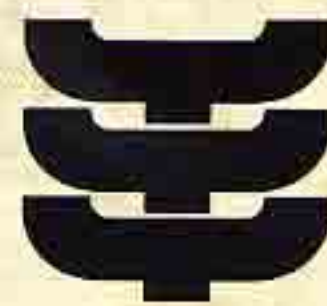
新発見にあわせて行った和田山町駅前展示館「アートほほえみ」での地域文化財展『古代但馬の王墓』も出足好調です。

『ひょうごの遺跡』の愛読者の皆様は、この夏歴史の再発見があったでしょうか。

機会があれば、但馬の遺跡を訪ねてみてください。

地域文化財展シンポジウムの成功を祈りつつ…。

(S.O)



文化財愛護シンボルマーク



「こころ豊かな兵庫」を
めざして